

雜 錄

● 印度に於ける鐵鋼業

(在カルカッタ帝國總領事代理副領事申谷正造報告)

英領印度に於ける鐵鋼業の狀況 ベンゴール、ビハール、オリッサ兩州は印度に於ける歐洲式鑄鑛法による唯一の鐵鑛產地なり、鐵鑛鑄解は嘗て廣く行はれるものにてインダス、ガングチス及ブラマプートラ一大沖積層以外鐵鑛の産せざる地方なく所謂原始的アイアンスマルティングに依り鐵鑛供給を得るに於て何等困難を感じざる有様なりき銑鐵及鋼鐵製造の歐洲式進歩せる方法による試みは既に一八三〇年南アルコット地方に行はれたり爾來幾多の試みありたるもベンゴール州内バラカル鐵工場を除きては其他は皆何れも失敗に歸せり、バラカル鐵工場は初め其位地を石炭及鐵鑛獲得上便宜の地に占めしが其後鐵鑛は距離遠からざるビハール、オリッサ州より得ることゝなれり、該鐵工場は一八七五年に創設せられ其後幾多の變遷を経て一八八九年にベンゴール鐵鋼會社の所有に移りたるも一八九九年迄は其成績面白からざりき。

印度に於ける製鐵所は目下の處々鐵鋼會社及前記のベンゴール鐵鑛會社の二會社の獨占にして最近に至りては事業も益々擴大し好成績を收めつゝあり。

ベンゴール鐵鋼會社 一九一〇年同會社はビハール、オリッサ州バンシラ、ブラ及ブダブラの兩地より鐵鑛獲得を開始せ

り此の時を以て同製鐵所は正に其の事業に一新紀元を劃せりと云ふを得べし、前記二鐵鑛々脈は地質學者の調査に依れば海抜二千呎乃至三千呎(附近谿谷より一千乃至二千呎の地點を走り其延長四十哩に達すと云ふ目下會社は一日約八十噸の銑鐵を製出し得べき鑄鑛爐四箇を有す一九二〇年銑鐵の産額約九萬噸(前年約八萬五千噸)一部は同會社消費一部は市場に一部は日本に輸出せられたり。

タタ製鐵會社 一九〇七年に創設せられ一九一一年には銑鐵を一九一二年にはマイルド、スチールを産出するに至れり。同社は公稱資本三千五百二十一萬二千五百留比を有し其採掘權を有する二大鐵鑛は何れもビハール、オリッサ州土侯領にありて目下採掘中なり其一は七百萬噸の鐵鑛を藏し特許料として仕拂ふべき額は最初の三十年は同一噸に付一安半、後の三十年は同五安に過ぎずと云ふ。

同工場設備の重なるものを擧ぐればコークス燒爐の二百三十箇、鑄鑛爐五、六箇、三百噸又は千二百噸入ミックサー各一箇を有する等にして一日平均一萬七百七十五人を使役す而して一九二〇年に於ける銑鐵産出額二十二萬千噸(前年同二十三萬二千噸)に上り實に本年三月に終る年度に於ける純利益千六百六十九萬五千三百五十留比を收めたりと云ふ、歐洲大戰に際してはメソポタミヤ、パレスチン、東阿弗利加及サロニカ等に於ける軍用軌條及枕木を供給して戰爭遂行上多大の貢献をなせり。

此等二大製鐵所の一大利便とする所は燃料炭を得る事容易なるの點にあり何となれば印度炭の産地はベンゴール及ビハール、オリッサ州なるが就中後者の如きは一九一九年産出額

千五百十一萬九千噸（ベンゴール州同五百七十七萬七千噸）なりき尤も翌年に至り何れも減額し印度全體の産額千七百萬噸に下れり、市價は一九二〇年四月中ジェリア一等炭々坑渡五留比四安なりしが翌年三月中十一留比に騰貴せる有様なり。

印度に於ける鐵鋼産額（噸）

年	銑 鐵	鋼
一九〇一年	三五、〇〇〇	
一九〇五年	四四、七六四	
一九〇八年	三七、六九二	
一九〇九年	三八、六三四	
一九一〇年	三五、九三三	
一九一一年	四九、一八三	
一九一二年	一四五、八八三	
一九一三年	二〇四、一一一	六三、一七五
一九一四年	二三四、七二六	六六、六〇三
一九一五年	二四一、七九四	七六、三五五
一九一六年	二四四、七一〇	九二、九〇二
一九一七年	二四八、一三二	一一四、〇二七

右表の示す通り漸次産額を増加し來り、前記製鐵所に於ける一九一九―二〇年鐵鋼産額は八十萬噸にして（前年度は七十八萬二千噸）其中重なる産出は銑鐵の三十一萬七千四百噸鋼の十六萬九千八百噸、銑錠（ブルーム）の十四萬六千五百噸等なりき。

鐵鋼類價格の變動 最近ベンゴール州廳發表に係る調査報告に依れば一九二〇年三月末に終る過去一年間の鐵鋼類卸賣平均價格の變動左の如し。（建値單位一モント）

品 名	一九一九年 三月乃至六月	同 六月 乃至九月	同 九月乃至 十二月	二〇年一月 乃至三月
銑鐵ダスト、スラッグ類	五・四	五・六	五・〇	四・一〇
條板、桁類	一九・一〇	一四・一二	一三・四	一二・四
機械及工場用品	四五・二	四五・二	四五・二	四五・四
其他（金物類を含む）	六七・一四	六二・四	五二・六	四三・四

鐵鋼輸入狀況 左表は一九一七―一八年に終る過去六ヶ年鐵鋼（刃物、鐵器、機械、鐵道用具、車輛等を含まず）の英領印度輸入額を示すものなり。（噸）

年	鐵 及 鋼
一九一三―一三年	七二九、三一
一九一四―一四年	一、〇一八、二四八
一九一五―一五年	六〇八、六三五
一九一六―一六年	四二四、五九七
一九一七―一七年	二五七、〇七九
一九一八―一八年	一五二、〇四九

鐵鋼（製品を含む）は印度輸入貿易の第三位を占む一九一九―二〇年に於ける輸入總額四十二萬七千噸（前年度即ち一九一八―一九年には十八萬四千四百噸）にして前年度より十三割五分の増加なれども相場安の爲價額は左まで上昇せず僅に三割一分を増加して總金額一億六千三百三十萬留比なりき、輸入數量は之を戰前即一九一三―一四年の夫れに比すれば尙五割八分方不足せるも一九一四―一五年即ち戰争以來の最高記録を示せり、一九一九―二〇年度に於ける鐵、鋼輸入貿易を其前年度に比し顯著なる點を列記すれば

(一) 鐵板は約十一萬四千噸即ち二十一割八分増加

(二) 梁、柱、橋材、管、筒、補助裝具、小割板、箍、軌條、坐鐵、狹接鐵、鋼アングル、スプリングス及棒、溝等の増加

(三)釘、鋏、坐鐵、螺旋及線の減退等なり。

亞鉛引鐵板は一九一八—一九一九年には僅に二千五百噸の輸入なりしも一九一九—二〇〇年度は五萬八千四百噸に増加せり、右は主として英本國よりの輸入増加に因る、英本國よりの輸入は總額の九割六分を占む錫引鐵板の輸入は三割二分方増加して總額四萬二千二百噸中二萬八千二百噸は英本國より一萬二千六百噸は北米合衆國よりの輸入に係る其他の鐵板(亞鉛引、錫引其外)の輸入六萬六千噸前年に比すれば約三倍に達す英本國よりの輸入は内七割三分を占む鐵、鋼棒及溝形鐵は一九一八—一九一九年度には三萬四千噸の輸入にして一九一九—二〇〇年度には九萬千に増加せり、右は鐵板に次いで著しき品目とす左れども戰前に比すれば尙六割五分の減少なり、中米國(四割七分即三萬八千噸)英本國(三割六分即ち二萬九千噸)を主要輸入國とす。

梁、柱、坐鐵、及橋梁材等は一九一八—一九一九年に於ては僅に九百噸なりしも一九一九—二〇〇年には二萬二千七百噸を輸入せり左れど戰前に比すれば約四分の一に過ぎず、鐵簇及ストリップスは主として綿及黃麻ベールリング用と茶函用帶に使用せられ一九一八—一九一九年は二萬三千噸、一九一九—二〇〇年には二萬八千噸を輸入せり、中英本國よりは一萬六千五百噸北米合衆國一萬千三百噸を占むスチール、アングル及スプリングの輸入は(一九一九—二〇〇年)夫々一萬四千八百噸、三千二百噸にして中 七割五分は英本國二割二分は合衆國よりの輸入とす、鑄鐵パイプス及裝具等の輸入一萬五千噸にして英、米の輸入比例は四對一の割合なり。

左に鐵鋼輸入(製品を含む)統計を示さん。(噸)

國別	一九一三—一四年	一八—一九年	一九—二〇年
英本國	六〇九、二〇〇	七六、九〇〇	二六九、三〇〇
獨逸	二〇〇、一〇〇	—	九〇〇
白耳義	一七三、〇〇〇	—	一三、二〇〇
北米合衆國	—	七六、一〇〇	一三四、五〇〇
日本	—	一五、三〇〇	二、二〇〇
其他	一三、九〇〇	一三、一〇〇	六、八〇〇
計	一、〇一八、二〇〇	一八一、四〇〇	四二六、九〇〇

鋼鐵輸出狀況 一九一九—二〇〇年度に終る過去五ケ年の輸出額を示せば左の如し。(單位噸、留比)

數	一九一三—一四年	一九一七年	一九一八年	一九一九年	一九二〇年
量	八五、〇〇〇	一五、〇〇〇	五、〇〇〇	一〇、〇〇〇	四三、〇〇〇
價	四四四、〇〇〇	六〇九、〇〇〇	三三、五〇〇	一三六、〇〇〇	四六二、〇〇〇

右の中大部分は銑鐵輸出と稱して可なり、一九二〇—二一年度に於ける銑鐵輸出は四萬八千三百五十八噸(價額五百六十三萬留比)に上り前年度の四萬一千七百噸(價額四百三十萬留比)に對比す其中、四萬七千三百六十八噸は日本向なり(前年度は九割六分を占めたり)、此の外同年度に於て滿鐵の輸出五百六噸ありしも殆んど全部日本へ輸出せられクロム鐵の輸出は又一萬七百噸にして五分の四は英本國一割六分は佛國へ向けられたり。

銑鐵東洋向運賃過去及現在統計(留比)

一、カルカタより東洋向銑鐵運賃(日本船)
但し噸に付(二〇ハンドレッド、ウエート)

	香港	上海	神戶
一九一四年	六・〇	七・〇	一五・〇
一九一七年	二五・〇	—	四〇・〇
一九一八年	五〇・〇	六〇・〇	八〇・〇

年	上海	神戸	門司
一九一九年	—	—	—
一九二〇年	三〇・〇	三二・八	八〇・〇
一九二一年	—	—	一八・〇
二、カルカツタより東洋向銑鐵運賃(但し英印汽船に由る)留比			
一九一三年	六・九	七・八	七・八
一九一四年	七・八	七・八	七・八
一九一五年	三五・〇	三〇・〇	三・〇
一九一六年	五〇・〇	五五・〇	五五・〇
一九一七年	五〇・〇	三〇・〇	—
一九一八年	七五・〇	七五・〇	七五・〇
一九一九年	—	六五・〇	七五・〇
一九二〇年	—	三二・八	四二・八

●鞍山製鐵調査

滿鐵の經營に屬する鞍山製鐵所の設備は當初百萬噸生産計畫の下に銑鑛爐二基並に其附屬機關、コークス爐及將來建設すべき製鋼工場、ロール工場敷地、市街用地等に四千四百萬圓を投資せるが鐵價下落以來其一基のみを使用し一日二百餘噸一年七萬餘噸の生産を爲しつゝあり而して之が鑛石は六〇パーセントの鑛石と四〇パーセントの鑛石とを混合して平均五〇パーセント品位のものとして使用し居れるも現今六〇パーセント以上の鑛石は百萬噸に達せず爾餘は概ね三〇乃至四〇パーセントのものなれば百萬噸計畫の下に五〇パーセント平均の鑛石年額二百萬噸の産出を得て此施設を持続することには前途甚だ困難とせらるゝ處なり、蓋し當初の計畫が戰事中好景氣に乗じて急遽工を起し十分研究を重ねるに至らざりし爲今日の結果を招致せるものにして前途甚だ憂慮に堪へずと

なし滿鐵に於ては今後の根本方針を決定すべく豫て井上匡四郎博士の手に依り調査研究中なりしが同博士の調査に依れば本來含鐵分五〇パーセント以上の鐵鑛は内地及び滿鮮を通じて存在極めて稀にして偶々之れあるも其量甚だ少く且つ其採掘運搬等に費用を要するが故に一噸當り拾圓以下たらしむること、頗る困難なるが之に反し含鐵分四〇パーセント更に下りて三〇パーセント程度の鐵鑛に至らば、埋藏莫大にして採鑛費も亦低廉なり、假りに鞍山製鐵所を中心とし半徑十哩の地帯内に見るも三〇パーセント以上の鐵鑛にして地表上に存在するもの、鑛量は少くとも四億噸に上るべく、而して其採取は組織的に全山岳を崩し去るに過ぎるが故に其費用は米國ユタ銅山等の例に照し大規模に作業するときは、一噸當り一圓以下たらしむるを得べく、工場迄の運賃を合計するも尙一噸當り一圓五十錢以下なるを得んと云ふ。

尤も含鐵分三〇パーセント程度の貧鑛と雖も獨逸のミツテ英國のクリーブランド鑛石の如く其夾雜分が石灰若くは石炭等鑛石の熔融に有利なるものにおいては必ずしも含鐵分の貧弱なることを憂へざれども、内地、滿鮮の貧鑛の如く夾雜分が主として熔融上不利なる硅酸より成るものにおいて此貧鐵鑛を直に銑鑛爐に投入すれば含鐵分の低下は直に之に比例する熔融の困難を意味するものにして試みに鞍山の鑛石に就きて之を驗するに五八パーセントの含鐵分鑛石中の硅酸は一八パーセントなるに對し、五〇パーセントのものは二七パーセントを含有し、而して是等熔融の爲めには鑛石中の硅酸分の約一、五倍に相當する石灰石の化合を必要とするを以て硅酸多量なるだけ鑛滓の分量は益々増加すべく、鑛滓の比重

は鐵の十分の四以下なるが故若し三〇パーセントの鑛石を原料とする場合には鑛滓の容積は實に之より生ずる銑鐵の容積の十倍以上に上るべく従つて勞費の過大或は鑛滓過多より生ずる種々の困難は殆ど實際の作業をも不能ならしむるの虞あり。

貧鑛の場合に於て現在の製鐵方法の下に現在の鐵價と炭價を以てしては到底其儘にて熔鑛原料として使用し能はざるも唯茲に貧鑛も之を高爐に裝入する前に適當なる選鑛處理の方法により其含鐵分を高むるときは、天然富鑛にも優る種々の利益を擧げ之に依つて加工費の幾部分を償ひ原鑛採收費の低廉なると相俟つて事業上に有利なる結果を來すことあり、實例としては銅鑛の場合に於て一九〇二年より米國ユタ州、ビンガムに於てデー、シー、ジャックリン氏が一、二パーセントの貧銅鑛を採掘し之を選鑛に附し確定的の成功を得たるとあれど鐵鑛にありては尙ほ其成否疑問なりとせられし處なりしがジャックリン氏は最近右の方法を更に鐵鑛の場合に試むべくミネソタ州メサピレンヂの東部一帯の二五%貧鑛に對し三百萬弗を費し研究する處あり、其結果遂に此貧鐵鑛の選鑛に成功し既にバビッドに大選鑛場を設立し其選鑛場完成の上は十萬噸の鑛石を處理すべき筈なり。

一日十萬噸の選鑛は試みに之を我國の八幡製鐵所の製鐵生産一ヶ年三十萬噸之が原鑛六十萬噸なるに比せんか即ち右の選鑛場は八幡の一ヶ年所要原鑛總量を六日間に處理するものにして其規模の大なるを察知し得べし尤も右の選鑛場は當初先づ三四千噸の選鑛を六月初めに着手し七月一日より日々一千噸の精鑛を市場に出すべき筈なりしも現下鐵價低廉の折柄

工事を暫く中止せり、而して其選鑛方法は磁鐵鑛の二五パーセントのものを少くとも半分丈け二百メシユ（一時の間に二百の目ある篩）にかけ得る程度に粉碎し之を大規模の磁選鑛機により六二乃至六三パーセント迄選鑛し更に適當なる方法を以て之を燒結してメサピシンターとして市場に賣出するものなるが現今米國に於ける普通天然鑛石は鐵分年と共に低下し最近の一年平均五二乃至五三パーセントとなり然も此内には十パーセントの水分を含有すれど右メサピシンターは六二乃至三パーセントの鐵分にして尙ほ燒結せる故水分なく天然富鑛よりも遠距離輸送の場合には運送費を輕減し得るのみならず人工的のものは天然のものよりもコークスの使用を節減し得る等の利益を擧げたりと云へり。

今此成功を試みに鞍山に移して其三〇乃至四〇パーセント程度の原鑛より六〇パーセント程度の精鑛を製出し其生産費より精鑛一噸當り十一圓以下たらしむるを得んか其效果たる恰も採鑛費一噸十一圓以下の廉價なる六〇パーセント以上の天然富鑛一億八千萬噸以上を發見したるに等しく現在天然鑛の十一圓以下なるものを求むること困難なる時に當り此方法にして實現せられんか獨り滿鐵の利益のみならず内地及び滿鮮の諸鑛山に多大の好影響を及ぼすものと云ふべし、即ち天然富鑛に比し其熔融にコークスを要すること尠なき人爲富鑛の利益は、コークスの價格高き程大なる道理にして將來假りにコークスの生産費が噸二十圓迄低下するものとし六〇パーセントの人爲富鑛を使用するものとせば銑鐵一噸の生産費は次表の如く四十七圓九十三錢の計算となるべし、今若し六〇パーセントの天然富鑛を使用して同一生産費の銑鐵を造ると

せば人為富鑛の場合よりもコークス及石灰石の消費量の増加
 爐の生産能力の低減、運搬すべき鑛滓の量の増加等總ての點
 に於て不利となる結果は次表の如く、鑛石は十圓三十四錢よ
 り高價なる事を許さず以て人為富鑛の有利なるを知る可し、
 尙三〇パーセントの貧鑛二、三噸を以て六〇パーセントの富
 鑛一噸を生産し得るが故に貧鑛四億噸は富鑛一億八千噸に相
 當す可し。

團鑛使用の場合の生産費

	數量	單價	計
該 炭	一、〇〇	二〇、〇〇	一八、〇〇
團 鑛	一、五六	一三、〇〇	二〇、二八
石灰石	〇、五五	三、〇〇	一、六五
其他費用			八、〇〇
計			四七、九三

天然富鑛使用の場合の生産費

該 炭	一、〇〇	二〇、〇〇	二〇、〇〇
鑛 石	一、三六	一〇、三四	一六、一一
石灰石	〇、六〇	三、〇一	一、八〇
其他費用			一〇、〇〇
計			四七、九三

以上は井上氏調査の結果なるが氏は其調査を進むべく、曩
 に米國に渡り更に種々研究努力する處あり、其勸誘に依りて
 先般米國知名の専門技術家より成る調査團の渡來となりしが
 其後是等技術家の實地考究の結果は鞍山の鑛石が鐵の含有分
 に於てバビットの夫れに優れるを知り、尙ほ粉碎の硬度に就
 ては大體優劣なく粉碎程度はバビット鑛が少くとも其半分を
 二百メシユとなすべきに對し鞍山は鑛石の四分の三を百メシ

ユに粉碎すれば可なりとせられたるも唯茲に鞍山鑛の大缺點
 なりとせらるゝは鑛石中に磁鐵鑛以外多量の赤鐵鑛を混入せ
 る事にして此點は撰鑛上不利尠ならずと云ふ。尤も鞍山八
 鑛山中大孤山櫻桃園は主として磁鐵鑛なれば尠くとも此二鑛
 區を基準とするに於て右貧鑛處理も充分見込あるが如く今回
 の調査は地理的關係の都合上主として此二山に集中せられ然
 も其調査も更に一層精細なる考究を俟ちボーリングの如きも
 全長一萬二千五百尺に達する試験を要し鑛石の性質を完全に
 研究し選鑛場の如きは其後に決定せらるべきものなれば其設
 計は既に着手せるも最後の決定迄には尙ほ時日を要すべし。
 尙ほ米國技師は此計畫の經濟的成功に多大の望みを屬し更
 に研究の結果を齎す等にて既に歸米の途に就けるが鞍山の地
 帯はメサビレンヂに比し聊かも劣らざる莫大の鑛石埋藏量な
 れば本問題の解決と共に其製鐵事業は前途寔に有望なを期
 待し得べく更に此貧鑛處理にして解決せられんか开は實に製
 鐵業以外の鑛業にも一種の革命を齎す可き産業上の大問題な
 りと稱せらる。

瑞西に於ける改正關稅率(スタール、ウント、アイゼン)

瑞西に於ける鐵鋼に關する改正關稅率は本年七月一日より
 實施せらるゝことゝなれり、該關稅率は鐵鋼並に鐵鋼生産物
 に對して一般に約一〇〇パーセント高められたり。即ち左表
 の如し。

番號	品 目	舊稅率	改正稅率
七一五	線材	一、五〇	三、五〇
七二二	冷却壓延材	二、〇〇	六、〇〇
七二三 a	線	〇、六〇	一、五〇

七二四	亞鉛引壓延材	四、五〇	一〇、〇〇
七二八	鋳力板	〇、六〇	〇、六〇
七三〇 a	機械製作用鋼薄板	〇、六〇	一、〇〇
七三〇 b	其他の鋼薄板	二、五〇	四、〇〇
七三五	軌條	三、〇〇	五、〇〇
七三六	軟同轉軌條	四、〇〇	六、〇〇
七三八	二百疋以上車輛	三、〇〇	四、〇〇
七三九	二百疋以下車輛	五、〇〇	八、〇〇
七四〇	挾接板	五、〇〇	八、〇〇
七四二	筒、管（鉸釘せざるもの）	〇、六〇	一、〇〇
七四三	筒、管（鉸釘せるもの）	三、〇〇	五、〇〇
七四四	フランシエン	三、〇〇	七、〇〇
七六三	五耗以下鑄鐵	一五、〇〇	四〇、〇〇
七六五	直徑十五耗以下線	一五、〇〇	四〇、〇〇
七九一 a	ハイツコルパー	三、〇〇	一〇、〇〇
七九一 b	ラヂエーター	七、〇〇	二〇、〇〇
七五二	鋤等	一、〇〇	二〇、〇〇
七六六	鉸釘	八、〇〇	二〇、〇〇
七六八	線索	一〇、〇〇	二五、〇〇
七七四	線索	一四、〇〇	三〇、〇〇
七七五	蹄釘	四、〇〇	三五、〇〇
七八三	金庫	一、〇〇	一〇〇、〇〇
七八九 a	罐用鋳力板	二五、〇〇	八〇、〇〇
七九〇	珐瑯質鐵器	三〇、〇〇	六五、〇〇
八九九	建築用鐵材	六〇、〇〇	一八〇、〇〇

●本多博士研究のニツケル鋼代用品

大砲の砲身や艦材に缺く事の出来ない、ニツケル鋼は軍事上最も重要な必要品であるが遺憾ながら吾國の現状では到底其の十分の一も充す事が出来ず大抵米國や、加奈陀邊りから

産出するものを用ひて間に合はせてゐる、所が今度海軍省では砂鐵中に含んでゐるチタニウムを基としニツケル鋼の代用品を作り出さうといふ議が起つて直ちに本多光太郎博士に其の研究を頼んだ、博士の話によると同合金製作に要する含チタニウム砂鐵は全國到る所無盡藏であるから右代用合金は比較的安く且つ澤山作り出す事が出来る譯であると、博士は此の堅い確信を以て新設の鐵鋼研究所に立籠り近く此の新研究に着手するといふが若し旨く成功した暁には國防上國家經濟上多大の利益を齎し吾が國の鐵鋼界に一大革命を卷き起す事となるだらうと期待されてゐる。

●鐵輸入制限運動 曩に歐洲大戰の影響に依て製鐵相場の暴騰せる當時内地販賣業者が思惑的に實際必要以上巨額の製鐵を海外より輸入したる結果其後反動的崩落に際し該ストツクが累を爲して我製鐵關係者は殊に深甚の打撃を蒙れるに鑑み今般今泉嘉一郎氏等は製鐵輸入制限案を提出し即ち製鐵を輸入せんとするものは政府の認可を受くべしとの法律を制定せられんことを議會に建議せん計畫の由なるが、之に對し販賣業者の多くは反對を唱へつゝあり、即ち我邦の製鐵業は未だ自給自足の域に達せず假りに鋼材に就て見るに一箇年の需要八十萬噸なるに對し内地製造能力は僅々四十萬噸内外に止まり、而も薄板物、鋳力の如きは如何にしても英、米品に依らざるべからざる關係にある現状に於て輸入制限を爲すが如きは策の得たるものにあらず、且輸入に當りて認可を得ざるべからざることとなれば爲めに商機を失すること夥しく營業者の不便利益尠からざるべしと云ふにあり。

●故大島評議員の葬儀

去る十一月七日午後二時より東京市谷中齋場に於て故本會評議員大島道太郎君の葬儀執行せらる。本會に於ては生花一對を供へ且つ會長香村小録君會葬して左の弔辭を朗讀せられたり。

故日本鐵鋼協會評議員從三位勳二等工學博士大島道太郎君の薨去を悼み恭しく弔辭を呈す。

大正十年十一月七日 日本鐵鋼協會々長工學博士香村小録尚ほ當日元製鐵所在職者總代として今泉嘉一郎君の朗讀せられたる弔辭左の如し。

大正十年秋十月暗雲天ヲ蔽ヒ風亦蕭條タルノ夕飛報アリ我技術界ノ偉人從三位勳二等工學博士大島道太郎閣下任地支那ニ在リ突然發病シ遂ニ長逝セラレタルヲ傳フ我等驚愕言フ所ヲ知ラス偏ニ萬一ヲ賴ンテ其報ノ誤ナランコトヲ希ヒシモ而モ終ニ事實ナリキ今ヤ幽明境ヲ異ニシ溫容視ル可ラス懇言再ヒ聞キ難シ嗚呼悲哉回顧スレハ閣下年少能ク嚴父ノ志ヲ繼キ夙ニ歐米ニ遊學セラレ其優秀ノ頭腦ト其該博ノ學識トニ加フルニ不屈不撓勤勉事ニ當ルノ特性ヲ以テシ本邦鑛業ノ爲メ盡悴セラレタルコト殆ト四十年常ニ斯業改善ノ先驅トシテ範ヲ後進ニ示サレタリ明治ノ初季以來本邦鑛業ノ施設其面目ヲ一變シテ歐米ト進歩ヲ競フニ至レルハ閣下ノ努力ニ依ルモノ最モ多シトス就中閣下カ我カ製鐵事業ノ爲メニ致サレタル功蹟ノ如キハ長ヘニ國民ノ忘レ能ハサル所ナリ曩ニ官立製鐵所ノ創立セララル、ヤ技監トシテ長官ヲ助ケ施設經營ノ要職ニ當リ拮据七年具サニ辛酸ヲ嘗メ遂ニ其創業ヲ完フシ本邦製鐵事業ノ基礎ヲ造リ之ヲシテ

今日アラシムルニ至レリ次テ隣邦支那ニ聘セラレテ更ニ一大製鐵所ヲ新設スルノ任ニ當リ苦辛又七星霜遂ニ其施設ヲ終ヘ隣邦ヲシテ其技量ト人格トニ對シ深ク心服スルニ至ラシメタルハ獨リ閣下ノ名譽タルノミナラス實ニ我一般技術界ノ信望ヲ中外ニ發揚スルコト大ナリト云フ可シ加之閣下ニ依テ近世的工業ノ基礎ヲ造ラレタル支那ノ製鐵事業ハ他日之ヲ以テ本邦ノ斯業ヲ資ケ共ニ相携ヘテ東洋ノ爲メ鐵自給ノ目的ヲ達スルニ至ランコト毫モ疑ナキ所ナリトス閣下ノ功勞夫レ此ノ如シ宜ナル哉和田維四郎先生並ニ渡邊渡博士ト共ニ本邦鑛業界ノ三大偉勳者トシテ世ニ推稱セラル、ニ至ル然ルニ先ニ渡邊博士ヲ亡ヒ次テ和田先生ヲ吊ヒ而シテ今又閣下ノ長逝ヲ見ルニ至リタル我等ハ獨リ私情トシテ哀悼ニ堪ヘサルノミナラス國家ノ爲メ實ニ痛惜措ク能ハサルモノアリ思フニ閣下猶幾多爲スアルノ春秋ニ富ミ精力亦絶倫而モ遂ニ今日ノ事アリ蓋シ勤勞過度ノ事又其一因タラサルナキカ閣下多年内外ノ任地ニアルヤ常ニ家族ヲ伴ハス子女團欒ノ樂ヲ棄テ、獨リ客窓ノ孤住ニ甘シ身神ヲ盡シテ其任務ニ當ラレタル如キハ苟モ職責ニ對シ限リナキ熱心ト極リナキ忠誠トヲ有スルニ非スンハ爲シ能ハサル所ナルヘシ晚年ニ及ヒ最愛ノ令兒ヲ亡ハレタルノ不幸ハ遇々以テ今日ノ事ヲ激發セル乎閣下ノ如キハ實ニ自己ノ一身ト其一家トヲ犠牲トシテ斯業ノ爲メニ盡サレタルモノト云フ可シ我等今尊靈ノ前ニ起テ過去ヲ追想シ萬感胸ニ迫リ又多ク陳ヘ難キヲ覺ユ然レトモ謹テ尊靈ニ告ントス閣下ノ遺業ハ嚴トシテ東洋ニ存シ長ヘニ閣下ノ功蹟ヲ傳ヘン我等又益々奮勵努力閣下ノ遺旨ニ從フヲ期スヘシ閣下ノ靈希クハ瞑セヨ

大正十年十一月七日

元製鐵所在職者總代 今泉嘉一郎